

リスクディスコミュニケーションが生みだす食への不安 ——「コミュニケーション」の狭隘な理解はいかにして可能か——

東京国際大学 柄本三代子

1 目的

本報告は、リスクコミュニケーションをはじめとするなんらかのリスク言説は、ディスコミュニケーション（あるいは失敗）を産出してしまうものであり、そのことによって食への不安が放置される可能性について考察するものである。まず食のリスク評価に関する科学的知見／専門知をつかさどる食品安全委員会においてリスクコミュニケーションがどのように理解されているのか、という点について明らかにする。ある主体の考える特殊なコミュニケーション様態について議論するためには、そのコミュニケーション過程において他者（国民／消費者）をどのように想定しているのか、という点の考察も不可欠である。またリスクコミュニケーションの技術研磨には各分野からのアカデミックな関心が集まっているのだが、「合意」にいたる方法を技術的に考えることを前提とした狭いコミュニケーション概念にもとづいている。食の安全をめぐる使用されるリスクコミュニケーション概念は、社会学で議論するコミュニケーションとはおよそ別種のものであることを念頭におかねばならない。別種とはすなわち、コミュニケーションなるものは不可能性を含有するものであるという理解に欠けている、といってもいいだろう。またリスクコミュニケーションの過程において（自然）科学的知見の「外部」（受け入れざるをえない社会状況など）を必要としている点についても無自覚的である⁽¹⁾。以上の関心から、リスクコミュニケーションが必然的に抱え込んでしまうディスコミュニケーションが食への不安を増殖させるものである点について考察する。

2 方法

①食品安全委員会がおこなうリスクコミュニケーションの目的と経緯について検討する。たとえば2015年5月に提示された「食品の安全に関するリスクコミュニケーションのあり方に関する報告書」の内容と、そこにいたる過程を検討する。②食のリスクコミュニケーションに関して、その政策技術の研磨にそそがれる学問的関心の問題点について整理検討する。③実際に行われている各種リスクコミュニケーションにおいて、どのような言説戦略がとられているか、その特徴を抽出する。すなわち、食品安全委員会の具体的実践において、何をしてコミュニケーションと称しているのか、またそこで実際におこなわれるやり取り（コミュニケーション）はいかなるものであるかについて分析する。

3 結果・結論

「冷静に考えて行動できる市民」を他者として想定するリスクコミュニケーションの言説戦略のひとつに「食品はすべてゼロリスクではない」というものがある。このようなコミュニケーション形態においては、一方向的なものであり続けることによって目的は達成される。必然的にディスコミュニケーションを生みだす、このように形骸化したコミュニケーションを続けていこうとするなら、そのコミュニケーション過程において排除され断絶を経験した人びとは別回路を模索していかねばならなくなる。食の安全に対する関心を「社会に対する疑義」と位置づけるなら、その疑義は他の事象へと連鎖していくことは容易に考えられる。しかし、疑義を抱き情報を他者と共有するといった「リスクをめぐるコミュニケーション」は、リスクコミュニケーションの文脈において、妨げられるべきものとしが位置づけられない。

注 (1) 柄本三代子, 2017, 「食の安全をめぐる政府広報とマスメディアの責任」『日本マス・コミュニケーション学会 2017 年度春季研究発表会「研究発表論文集」』日本マス・コミュニケーション学会 HP(http://mass-ronbun.up.seesaa.net/image/2017spring_C4_Enomoto.pdf)参照。

※本研究は、JSPS 科学研究費基盤研究 (C) 【課題番号 16K04038】の助成を受けたものである。